

春の行事

今年は例年おこなっていた天ぷらギフは止めて昨年夏合宿で利用したことのある八ヶ岳清里の小平山荘に一泊し、当日は各グループごとに入笠山、櫛形山、立場沢、他でヒメギフ等採集、観察、撮影して後、山荘に集合し、夕食後、成果発表、懇親会を催す予定です。翌日自由解散といたします。もちろん天ぷらギフで一緒している群蝶会の皆さんも参加の予定です。

という案内通り 5/5～5/6 に例年と趣向を変えてヒメギフ主体の春合宿が総勢 25 名の参加をもって行われた。あいにく 5 日の山梨地方はドン曇りの寒い一日でヒメギフの乱舞はみられなかったが、ムモンアカシジミの卵と若令幼虫の観察やヒメギフ卵の確認等でそれぞれ適当に時間を費やしたようです。一番喜んだのは酒豪組のようでいつもより少し早めに酒盛りが始まったようです。

一方、一番遠くを予定していた北川、生駒、仁平の面々は霧と小雨の小諸に到着、ここで高速を下りてもヒメギフは終わっているし、どうしようかと空を眺めたところ目指す長野方面は何となく明るく少し良さそうな気配があった。長野の温度は 22 度と高め予報、だめもとで GO サイン、一路、野沢温泉村を目指したのであった。明石部落の手前から林道を入るとゲートがあると聞いていたがそれらしきものは見当たらず、デンと雪が寝そべっており車はストップ、空は高曇りで薄ぼんやりと太陽の輪郭がやっと見える程度であった。

残雪を踏みしめながら 20 分くらい歩くと道は二股、北川、生駒組は左へ、仁平は直進した。尾根へ出ると時々明るさが増し太陽の輪郭が強くなる、寒くはないしこれなら何とかと思いつつ枯葉の積もったあたりへ来るとチラッと見えたギフ、たて続きに 2 頭ネットしたが、いずれもボロ♂、チョット遅かったかと思っただが以後あらわれるものは完品が多くほっとする（朝一で飛ぶのはほとんどボロ♂であるのはいつものことである）いくら待っても北川、生駒組が来ないので約束時間まで粘って車に戻った。二人はすでに戻っており、話を聞くと左へ入った道の尾根でやはり二人で合計 9♂ ネットしたとか、私は 13♂ 1♀ であった。集合時間に遅れぬよう一路清里を目指す、途中松原湖でヒメギフ卵を少しつまむ、ここのウスバサイシンの量は半端ではなかった。

清里へ到着後の皆の話では本日成虫を見たのはわがグループだけで大いに非難を浴びたが、これは私を除く二人の普段の行いの良さの賜物としておこう？

夕食もそこそこに大方は 2 次会の会場へ、飲みながらだべりながらパワーポイントのマダカスカル紀行（倉地）アリと共棲チョウの話（坂本）他が 10 時ころまで延々とあったようだ。ようだというのは今朝 4 時起きの方は早々とダウンして最後まで見届けられなかったからである。

よく朝はうって変わって好天気であるがやはり清里は寒い。朝食後、記念撮影、そして各々

ヒメギフ他を目指して蜘蛛の子を散らすようにかき消えた。われわれは野辺山と山梨県境の高塔谷のヒメギフを目指したが、温度が低いのとポイントがわからずで敗退、午後やっと温度が上がってきたので松原湖へと回るもヒメギフは終わっており、清里付近へ行き午前中ここを荒らしまわった組み？のおこぼれ頂戴で数頭のヒメギフと卵確認のみで終わった。全体に今年のヒメギフの発生は早かったようで、ほぼどこも末期のようであった。心配していた渋滞も少なく皆順調に帰京したようであるが、詳しい話はまた例会で報告があるかと思う。

企画の方々がいろいろ趣向を凝らしてくれたので楽しい春合宿で、皆大いにリフレッシュしたようです。企画の方、参加の皆さんありがとうございました。次回もまた楽しく盛り上がりましょう！

* 住所変更、及びメルアド変更

森本博 〒102-0082 千代田区一番町 20-6 一番町マンション 403
 Tel:03-6661-8223 Fax:03-6661-8224
小林真一郎 〒158-0083 世田谷区奥沢 7-16-6
 Tel 変わらず
高橋俊一 kirara_oichi@ybb.ne.jp

* 清水英寿さんより¥1000の寄付をいただきました。厚く御礼申し上げます。

* 新刊

アゲハチョウの白地図	五十嵐邁	世界文化社	¥2800	03-3262-5115
虫の顔	石井誠	八坂書房	¥1800	03-3293-7975
昆虫樂園	澤口たまみ	山と溪谷社	¥1600	03-5275-9064
ひっそり生きる町田の自然	町田市企画部	広報広聴課	¥1200	042-722-3111

* 新聞紙上より

BOOK

24な顔(1) 悲しそうな顔、笑ったような顔、ずるそうな顔。『虫の顔』(石井誠著 八坂書房 1冊 800円税別)のページをめくると、昆虫が種類によって様々な顔つきをしていることが分かる。約100種の顔をイラストで紹介。生態を説明する文章も掲載し、生存のために顔も進化させてきたことが分かる。昆虫採集の楽しみが一つ増えそう。ちなみに、表紙の顔は「オオスズメバチ」。いかにも残酷なギャングという感じだ。

虫の顔

*生存のため進化

文化

日本から飛行機を乗り継ぎ、およそ三十時間。ブラジルのアマゾン川流域は昆虫愛好家のおこがれの地だ。私は五十歳を過ぎてから八十四歳の現在まで通算三十五回、ほぼ毎年通っている。

しばらく前までは網の目のような支流に分け入り、ジャングルで虫を追っていた。今は昆虫採集が禁じられているので、虫を通じて知り合った日

系人の友だちに会うのが目的だ。戦争や大病、借金など、これまでの人生でいろんな目にあってきたが、虫をさわったり、人情に厚いブラジルの人々と接したりしていると心が安らぐ。

18歳のカミキリムシ

関東大震災の翌年、東京の下町に生まれた私は、うっそうと緑が生い茂る上野、谷中あたりを遊び場にする。貧しい生活の中で遊びといえは虫捕りくらいで、ほかの多くの少年と同じようにすいぶん標本も作った。

二十歳で召集。どうにか生き延びて帰国すると、東京の家は標本もろとも灰になっていた。雑穀の商売を始めて無我夢中で働いたが、今度は結

昆虫が運ぶアマゾン愛

◇50歳を過ぎ採集に熱中、現地で触れた人情も財産◇

新井 久保



南米にしかない美しいチョウ「アグリアス」



出かけるようになる。友人を訪ねて初めてアマゾンに行ったのは一九七四年のこと。私は、武骨でゴソゴソ逃げ回ったりしないカミキリムシが好きなのだが、アマゾン流域には体長十八センチもある大物がいる。南米で見られる美しいチョウウ、アグリアスやモルフ

核にかかった。わりあい元氣だったので、武威野の病院の周りで虫を捕り、標本を入院仲間たちに見せると大喜びしてくれた。子供のころの情熱がよみがえり、退院後も雑穀店を営む傍ら昆虫を追って近所の山や海外に

オチョウも。見たことのない昆虫も多く、もう夢中になった。

も経験したので、ただ悔いのないように生きたいと思っている。ジャングルには毒蛇やヒョウもいる。ペルーではゲリラにつかまって身ぐるみはがれたが、アマゾン通いはやめられなかった。

アマゾン川中流の都市マナウスに着くと、テナトや食料をしょってくれるブラジル人二、三人を雇い、小舟で出発。人の通った跡のないところを目指して奥へ奥へと進む。かなりの奥地でも、

けると現地の子供たちが一生懸命に虫をとり、夜明けにドアの前で待っていてくれることもある。虫の居所はおいでわかる(気がする)。チョウを捕る場合は、日が差し込む比較的明るい林にカヤをつり、下にバナナやマンゴーを置く。集まってきたところを見計らって地面をたたき、ワツと飛び上がったチョウを網打尽。青やピンク色など鮮やかなアグリアスに出くわした時には「なんてすごい色だろう」と驚いた。こいつらに比べると人間っていうのは安っぽい。

禁止されても感謝。現地にあるアマゾン自然科学博物館の橋本捷治さんによると、二〇〇〇年ころからこの地域での昆虫採集が全面禁止になり、動植物の採集や持ち出しはできない。「残念でしょう」と言う人もいますが、三十年近く、さまざまな虫と出合わせてくれたアマゾンには感謝の気持ちしかない。私が

見つけたカミキリやアグリアスの突然変異体に「アライ」という名前を付けてもらえたことは、自分にとっての勳章だ。虫だけではない。アマゾンでは家族同様の付き合いの友だちをたくさん得ることができた。日系人には特に世話になった。最初は警戒もされたが、苦勞続きの人生を送った開拓者は人の情けを知っている。ゲリラに身をまかせられた私を迎え入れ、和食の手料理でなぐさめてくれた宮本さん一家など名前を挙げればきりがない。

最近では彼らの親類や知人が日本に働きにくる。

勤務先は地方が多いので、上京する時には自宅に泊まってもらって東京見物に付き合う。六月には日系移民百年記念の式典に招待されていて、半年ぶりにブラジルを訪問するのが楽しみだ。

明日へ

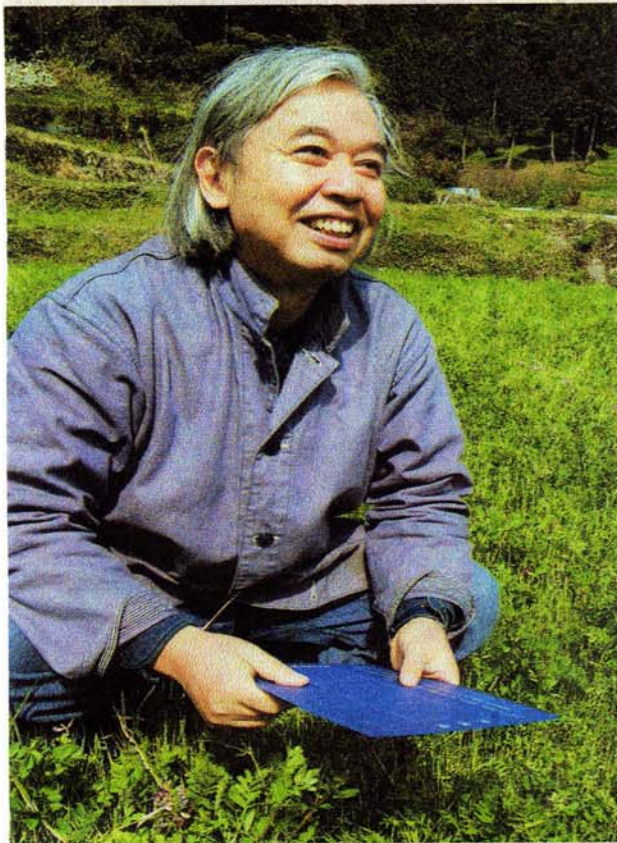
「茶わん一杯分のごはんができるのに必要なのと同じ面積の田んぼで、オタマジャクシが35匹、赤トンボが1匹育つ。ほらそこ！アマガエルが跳んだ」

福岡県二丈町の里山に連なる棚田。その畦にドツカと腰を下ろし、宇根豊さん(57)が語り出す。稲作農家で「百姓学」の著書も多数。田の虫を熟知する宇根さんが語ると、見慣れた田んぼが生命でざわめく。

県の農業改良普及員だった30年前、減農薬運動を始めた。運動の中から生まれ、販売されるようになった「虫見板」は累計18万枚のヒット作。下敷きのような板を稲の根元に差し入れて揺すり、落ちてきた虫を数える。シンプルさが受け、有機農業を試みる農家や環境教育を取り入れる

田の虫見つめ 減農薬

08.4.28 読売(9)



虫見板を手に、田んぼと虫たちの世界について語る宇根豊さん(福岡県二丈町で)＝佐藤淳撮影

学校に広まった。

虫見板の原型は、着古した学生服の布を張りつけた針金の輪。仲間の農家が1979年に作った。実際の被害とは無関係に殺虫剤をまく方式が一般的だった時代。虫見板は害虫と益虫のバランスを観察することで

被害の程度を予測し、農薬使用を最小限に抑えるツールとして誕生した。虫見板の上でクモが害虫のウンカを捕まえた瞬間を初めて見た時の感動は今も忘れられない。

ワラを分解して土を豊かにしてくれるトビムシ、田園風景を彩る赤トンボやホ

タル……。観察を続けるうち、害虫、益虫という二分法では説明できないたくささんの「ただの虫」たちが、さまざま役割を担っていることにも気づいた。

講演で各地に出かける。畑のニンジンの葉を食べて育つキアゲハの幼虫を例

に、地元の作物を食べる意味を説いたら、話を聞いた女性から手紙が届いた。子供が、食べようとしなかった離乳食のニンジンを食べるようになったという感謝の手紙。「このニンジンはアゲハチョウの幼虫さんが食べているのよ」と語りかけながら食べさせた、と書いてあった。

田んぼや畑は虫たちの世界を支え、そこに満ちる「農の恵み」が人の生命をはぐくんでいる。この豊かなつながりを思う母親のところが子供にも伝わったのではないか。宇根さんは受け取った手紙を大切にしている。

「地元の作物を食べることは単なる消費じゃなく、立派な自然保護。安くて安全というだけなら外国産を食べればいいが、それでは日本の原風景は守れない」